第92回米国医学図書館協会年次大会に参加して

六 本 木 利 治*

株式会社伸樹社

I. はじめに

Washington, DCはもちろん世界の政治の一大中心地であるが、医学情報に携わる者にとっても、いうまでもなく National Library of Medicine (NLM) をはじめ各種情報機関や大手出版社が集まる世界の医学情報の中心地である。今回の Medical Library Association 92nd Annual Meeting (MLA '92) は、1992年5月15日から21日まで、その Washington, DCの Sheraton Washington Hotel で開催された。この会議への参加も含め、周辺のいくつかの施設を見学する機会に恵まれたので、それらの様子・印象などを含めて報告したい。

II. 92nd MLA Annual Meeting

MLA '92の会場となった Sheraton Washington Hotel は、Washington, DCの中心部から地下鉄の Red Line で10分ほど行った Woodley-Park-Zoo 駅のすぐそばにある。

会議の日程は5月15日～21日となっているが、実質的には17日～20日が本会議となっている。継続教育コース(CE)は主に本会議の日程の前に開かれる。CEは33コースが開かれた。一日コースと半日コースがあるが、今回は“Drug and

Pharmaceutical Information” というコースに参加した。参加人数は30人ほどで、医薬品情報の調査に必要な各種情報源の紹介とその使い方についての講義を聴講した。このコースは講師の説明が中心だったが、他のコースでは演習なども行われているようである。

5月17日

13:30から本会議が始まる。出席登録者は世界中からの参加者を含む約1,300人ほど。比較的年配の女性が多い。実際に参加するまでは、漠然とこじんまりとした会議をイメージしていたが、豪華なホテルのメインホールを借り切って行われた MLA '92は想像を遙かに上回る規模であった。ロビーは一年ぶりの再会を喜び合う人達であふれ、Tシャツやトレーナーなど各種のMLAグッズが並んでいる。会議というよりイベント、一種のお祭りと言ってもいいかもしれない。

今回の MLA '92 のメインテーマは“Choose to Make a Difference”。ビジネス分野、特にリー

写真1. MLA '92の入口にて

* Toshiharu ROPPONGI : 〒160 東京都新宿区信濃町21, 大門ビル2 F.

(1992年7月30日 受理)

ダーシップの在り方について多くの著書を持つ Warren Bennis 氏が Plenary Session I の Key-note Speaker を務めた。医学や情報学分野からでなく、ビジネス教育の専門家が基調講演を行うところに、情報社会への転換期の中で医学図書館がどのような地位を占めていくべきか、また社会からどのような役割を果たすことを要求されているかを感じた。

夕方から、海外からの参加者を招いた International Visitors Reception が開催された。出席者は80人ほど。6人ずつのグループでテーブルを囲んでそれぞれ自己紹介をかわした後、隣の席のデンマークの病院図書館員とたどたどしい英語で会話をかわしながら、改めて国際的な学会に出席している実感をかみしめると共に、自らの英語力の未熟さが恥ずかしく思われた。ただ、このあと随所で感じたのだが、もちろん講演内容などを正確に聞き取ることができ、自分の伝えたいことを明確に述べられるだけの英語力があればそれに越したことはないのだが、たとえ上手に話せなくても、言い方は悪いが、意欲さえあれば後は何とかなるのではないだろうか。要はコミュニケーションの取り方であり、それは Try and Error の中で学んでいけばいいのではないかと感じた。もちろん、いつまでも相手に迷惑をかけないために自分自身の語学力を高めなければならないのは当然のことであるが。ただ、一つ簡単に準備できるものがあるとしたら、海外で利用できる日本の情報源について、データベースや冊子体を含めてあらかじめ調べておくといいかもしれない。実際、CEを受講した際に講師から日本の医薬品情報についていくつか質問を受けたし、日本で海外の情報を得るのに比して、海外で日本の情報を得るのには困難が伴う。こうした知識を持っておくとちょっとした会話の際に役立てることができるし、日本の情報を海外に紹介する意味でも、日本人としてこうしたツールをコミュニケーションの場で紹介

できることはささやかな国際交流として意義があるのではないかと感じた。

引き続き Welcome Reception が始まる。軍楽隊の入場に続いて国歌の演奏。最初は演奏だけかと思っていたが、次第に回りの人の歌声が集まり、あっという間に大合唱になっていったのには驚かされた。そういえば、ここはアメリカ合衆国の首都なのである。

軍楽隊の行進の後に続いてレセプションの会場に入る。日本の感覚からすると驚かされるのだが、レセプション会場は Exhibit Hall、つまりDIALOGや SilverPlatter などのブースが集まる展示会場で行われた。つまりワインや軽食を楽しみながら各ブースを回るという趣向である。出展社は雑誌社、雑誌代理店、データベース業者、原報提供業者やCD-ROM製作者など多岐に渡り、総数約120社ほど。アメリカにおける医学情報および図書館を支える産業の幅広さを実感すると同時に、産学協同、つまりMLAは各企業に協賛を求めると同時に、MLAは参加者が各企業の製品に触れる機会を増やすという相互協力の在り方を感じた。会期中の各発表セッションも多くがこれら企業の協賛であり、全体として、企業とMLAが協力して医学情報を発展させていくという方向性を感じられた。

会場内のデモに使用している機器では、Macin-

写真2. Exhibit Hall にて

tosh の姿が非常に目立った。大手のCD-ROMも既に多くが Macintosh に対応していた。近年日本でも Macintosh が急速に普及しているが、明らかに今後の情報検索機器の中心になりそうな印象を受けた。しかし一方のIBM PC上で動作するCD-ROMも、CD-PLUSや Aries 社のものなどに見られるように、MS-Windows で動作するものが目立った。パーソナルコンピュータ業界における Mac vs. Windows の縮図を見る思いがしたのと同時に、グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) がエンドユーザー検索を含めた情報検索のキーワードになりつつあるのを感じた。

NLMのブースでは、Unified Medical Language System (UMLS) の展示が注目を集めていた。UMLSは医学文献や医療の現場など様々な状況で使用される医学用語を統一的に管理し、医学情報の有効利用を図るためのプロジェクトである。UMLSは現在、1) MeSHやSNOMEDなどを統合する Metathesaurus 2) 用語の意味や関連を明確にする Semantic Network 3) 適切な情報源を照会、提供する Information Sources Map の三つのシステムで構成されている。これらは例えばデータベースのフロントエンドや医療情報システムの構築など様々な用途に利用されることになる。NLM自身もUMLSを利用した“COACH”というエキスパート検索システムを開発中である。

写真3. UMLSの展示

出口のところで、翌年の開催地であるシカゴが設置したブースでもらったピザをほおぼりながらこの日は会場を後にした。

5月18日

この日から本格的なセッションとなる。Concurrent Session はメインテーマを展開する形で“Great Debate”と称して次の四つのプログラムが設定された。

1) The Librarians as Leader

図書館員はCIOs (Chief Information Officers) であるべきである。

2) Library Technologies

旧来の図書館による「所蔵」の考え方は電子メディアによる利用に置き換わる。すなわち従来の本は死滅する。

3) Escalating Prices

電子出版は雑誌の価格を低減する。

4) Outcomes and Total Quality Management

図書館員は情報の加工・流通とその評価を通して Total Quality Management における中心的な役割を果たすべきである。

以上のテーマで18, 19の両日にわたってディベートが行われた。

また、首都で開催されるMLAにふさわしく、“People Power”というイベントが開催された。これは会員が議会を訪問し、医学図書館関係の立法に影響のある議員を訪ね、直接要望を伝えるという一種のロビー活動である。日本ではとても考えられないイベントであろう。

昼食時には“Lunch and Learn”というセッションが開かれた。これは Exhibit Hall で買ってきた軽食を食べながらBRSや Cambridge など各企業のワークショップを聴くというものである。昼食を食べながらのディストリビューターによる Search Tips の紹介はなかなか楽しい趣向だった。

この日の夕方に、NLMの現状と将来展望を報告する“National Library of Medicine Update”が開催された。この中で、Lois Ann Colaianni 副館長が、冊子体の利用の減少やオンラインの優位性などを理由とし、冊子体の Current Catalog の発行を1993年をもって中止すると発表した。NLMは今後は Current Catalog の代わりに CATLINEやSERLINEなどを位置付け、ユーザーインターフェースの開発や Internet からのアクセスなどを可能にするなどこれらのシステムを更に改善していく予定であると述べたが、CATLINE が直接利用できない日本では重大な問題である。オンラインと冊子体の相克の問題を如実に示していると言えよう。一方、NLM Classification の改訂版が1993年末までに発行されること、エンドユーザーを対象とした原報発注システムである Loansome Doc の個人ユーザーは現在1,391人おり、23,000文献を注文していること、Internet を通してDOCLINEからの注文をさらに拡大していくことなどが発表された。

夜は会場を Sheraton からNLMの裏庭に移して、Friends of NLM (以下 Friends) の主催による“Pig Roast”というガーデンパーティが催された。ここで、Friends の概要について紹介する。Friends は1986年に設立されたNLMの活動を支援する組織である。委員103、機関会員111、個人会員約900で構成されており、会員からの年会費で運営されている。年間予算は\$412,000である(いずれも1991年)。これらの予算はNLMの研究・教育活動、広報や奨学金など、また会員へのサービスに使われる。例えば1992年の活動では、以下のような活動を行っている。

- Health Science Computer Education Project
- Conference on AIDS Information
- Promote PDQ Cancer Database
- Regional Friends Programs of RMLs
- Friends Award for Librarians in Small Hos-

pitals

- Friends Press Award
- Renovation of the Billings Study at the NLM
- History of Medicine Fund
- Capitol Hill Briefings on Development at NLM
- Explore Feasibility of International Corporate Members

これらの活動によってNLMを支援することを通して、医師がより医学情報を利用しやすい環境を整備するのが Friends の目的である。なお、“Friends”は「友の会」といった意味で、各種の機関に“Friends”が置かれている。例えば NIHの Clinical Center にはやはり Friends of the Clinical Center という組織があり、寄付や基金を募っている。

“Pig Roast”は、その名のとおりに、豚の丸焼きがメインである。調理人がさばいた肉をパンに挟んでくれたものが出てくる。屋外でカントリー & ウェスタンを聞きながらこれらの料理を味わうというアメリカらしい趣向であった。残念ながら雨に見舞われたが、それも途中でやみ、楽しい一時を過ごすことができた。

また同時に Lister-Hill Center 内で、NLMの部局である National Center for Biotechnology Information (NCBI) が製作している Entrez : Sequence というCD-ROMの展示が行われた。これは、Genbank に含まれる35,000の核酸配列データ、Protein Identification Resource (PIR) などに含まれる53,000の蛋白質分子配列データ、およびMEDLINEに含まれる86,000の分子配列関係の文献データの3種類から構成されており、それぞれリンクして検索できるようになっているデータベースである。Macintosh か MS-Windows上で作動し、これをNCBIは\$60前後という低価格で販売している。

5月19日

翌日は Plenary Session IIとして“Communication in the Physician-Patient Relationship”や、前日に引き続き“Great Debate”が開かれた。

この日、NLMのブースでクラフト敦子さんにお会いすることができた。クラフトさんは「医学図書館」誌上でもたびたび紹介されているが、NLMでMEDLARSの索引作業に長い間携わってこられた方である。この日の午後はクラフトさんを囲んで日本からの参加者との歓談となり、ここでクラフトさんからNLMやMEDLINEについていろいろ参考になるお話を伺うことができた。以前MEDLINEの更新が月一回だった頃は、締め切りに間に合わないとか一月遅れになってしまうため、多少締め切りを延ばしても多くのデータを入れるようにしていたが、毎週更新になってからはそれほどあわてる必要がなくなったとのこと。また、毎週更新になったからと言って特に忙しくなったということはないが、前述の Entrez にリンクさせるために遺伝子名や蛋白質名などのチェック作業が増えたことで、多少索引作業が複雑になってきているとのことである。

この日の夜は、President's Reception が開催された。会場は市街地にある高級住宅を借り切って行われた。この家は現在空き家だとのことだが、住宅というより、超高級ホテルを思わせる豪華な内装に、たとえ現在経済的に行き詰まってきてい

るとはいえ、アメリカの豊かさ、生活と文化の奥行きを深さを見る思いがした。また、こうした会場を選んだMLA事務局のセンスの良さにも感心させられた。

5月20日

この日が実質的なMLA '92の最終日である。午前中は Exhibit Hall でまだ回り切れなかったブースをあちこち回ってパンフレットなどを集め、午後は“Obtaining Copyright Permission”という workshop に参加した。演者は National Epilepsy Library (NEL) でデータベースを作成している担当で、データベース作成、原報受注の中で発生してくる様々な著作権の問題にNELがどう対応しているかが述べられた。データベースの作成時に雑誌名やISSNと Copyright Clearance Center (CCC) のコードを管理するテーブルを設計し、これと原報の発注テーブルをリンクさせることによってCCCへの報告書を出力しているとのことである。ADONISの登場や、British Library による従来とは別料金での著作権をクリアした複写物の提供など、著作権に対する関心は世界中で非常に高まってきている。一方日本でも複写権センターが設立されるなど、今後著作権を巡る問題は一層厳しくなってくることが予想される。そのためにもこの問題に真剣に取り組むことが重要であろう。

会議が終了したこの夜、Farewell Party が開催されたが、体調を崩し参加できなかったのが残念だった。

会議を通して

高度情報社会の成長の中で医学情報の世界も大きな改革を迫られている。そうした中で、様々な情報機関が、いかに多数の中に埋没しないよう自己の存在をアピールできるかが問われている。今回の MLA '92のメインテーマ“Choose

写真4. 日本からの参加者と

to Make a Difference” はまさにそうした変革の中でいかに他者との差別化を図っていくかの重要性を訴えていると言えよう。一方、そうした姿勢は会議のプログラム自身の構成の中にも示されている。それは例えば開会に当たってのビジネス教育分野の専門家の招聘であり、ディベート形式による討論であり、また議会へのロビー活動などである。いずれも従来のMLAの枠を越えた斬新な試みであり、MLA自身がいかに差別化を実現していくかの姿勢を示している。全体を通して、危機意識を持ちつつも力強い一步を踏み出すためにはどうしたらいいか、そうしたことを考えさせられる会議であった。

しかし、MLA '92自体はそうした難しい側面を忘れさせるほど華やかでエキサイティングなイベントであった。とにかく一言で言えば、非常に「楽しい」会議であったというのが会議を終えた印象である。

Ⅲ. 周辺の機関

1. National Library of Medicine

NLMは、MLAの会場である Sheraton に向かう地下鉄と同じ路線である Red Line でさらに郊外に向かった Medical Center 駅にある。地下鉄の駅は大変深いところにあり、100m以上も昇るエスカレーターを使わなければならない。周辺には政府や軍の重要施設があることから、ここは核シェルターになっているという俗説があるが、これは単に地盤が硬いため深い所を掘らざるを得なかったらしい。この辺り一帯は National Institutes of Health (NIH) の敷地内であり、世界の医学研究をリードする研究施設が数多く並んでいる。

芝生の中を5分ぐらい歩くとNLMに到着する。この周辺は外に食事を取れるところがほとんどないので、Lister Hill Center 地下の食堂で昼食を

取る。一応職員用だが訪問者でも利用できる。

NLMの並びにある Lister Hill Center で見学ツアーが週末を除く毎日13:00から開催されているのでこれに参加する。MLAの会期中からか、狭い visitors room が満員になる盛況である。一通り館内を案内してもらった後、普段のツアーでは見せてもらえないようだが、地下書庫に案内してもらう。外から見るNLMは低い建物だが、これは書庫をはじめ業務関係の部屋が全て地下にあるためである。

地下は3層になっており、それぞれ

B 1 1980以降の journal

B 2 1914以降の単行本、会議録など

B 3 1914-1979の journal

これ以前の資料は全て1Fの History of Medicine Collection の書庫に並べられ、マイクロ化など保存のための処理が取られている。天井が低いせいか、書庫の中は意外と狭く感じる。換気のためか巨大な扇風機が設置されている。また、複写機にも工夫が凝らされている。通常複写を取る時には本を複写機に持って行って複写を取るが、NLMでは書架の横に台車に乗せた複写機が置いてあり、それを押して複写したい本のある書架まで持って行って複写を取るのである。電源コードは天井のレールからぶら下がっている。実に合理的な取り方に驚かされた。その他、MEDLARSのホストコンピュータールームなども見学したが、

写真5. NLMの地下書庫にて

ここも地下にあるため、以前大雨で浸水しホストダウンになったことがあるそうである。

ツアー終了後、閲覧室を見学する。館内には多数の端末が置かれ、MEDLINEやCATLINEを自由に検索できるようになっている。NLMの雑誌所蔵目録であるSERLINEは閲覧室からでは検索できず、大量の打出しが所蔵調査用として置いてあるのみであった。これは現在の Grateful MedがSERLINEに対応していないためで、6月にリリースされるバージョンアップ版ではSERLINEもメニューに含まれるので、館内からでも使えるようになるとのことであった。

その他、閲覧室にはGPOや Gale のCD-ROMが置かれ、これらも利用者が自由に使えるようになっている。また、NLMが開発したMEDSTATという、医学統計の書籍をメニュー方式で検索するCD-ROMが置かれていた。レファレンスカウンターには、Macintosh の Super Card で作られた非常に使い勝手のよい館内案内が設置されていた。

NLMの出納は閉架式である。ただ、日本の国会図書館のように出納時の呼び出しなどはなく、出てきた本は貸出カウンターの後ろの棚に置いてあるだけである。したがって自分の本を取るためには、本に挟んである申込のスリップを頼りに図書館員に取ってもらわなければならない。複写は自分で取るのが原則だが、大量に利用する人のために、申込むと資料そのものでなく直接複写物が出てくる Overnight Photocopy Service という申込形態もある。

2. Library of Congress

Library of Congress (LC) は、議事堂のすぐ後ろにある。地下鉄の Capitol South 駅が近いが、Union 駅から並木道を通り、リスを眺めながら行くのも趣がある。

LCの代名詞とも言える main reading roomは

ヨーロッパの寺院建築を思わせる壮麗な Jefferson Bldg. にある。中央にカウンターがあり、その周囲を円形に閲覧机が囲んでいる。天井はキリスト教の大聖堂のような巨大な円形ドームとなっている。訪問した時には気付かなかったが、ブック型パソコンを使えるように各机にコンセントが設置されているとのことである。

ここも当然ながら閉架式であり、請求票に記入することになるが、請求票に“hold”と“overnight”という見慣れないチェック欄があるので聞いてみると、“hold”は申込んでその日に本を出してもらう指定、“overnight”は翌日に本が出てくる指定とのことである。なぜそうした区分が必要なのかは実際に申込んでみてわかった。本が出てくるまで二時間以上かかる。これは書庫が三つの建物に分散しているのが原因のようである。閲覧室をしばらく観察してわかったのだが、LCは一日だけ来てちょっと資料を見て帰る、という使い方をするところではなく、何日も通いつめてゆっくり調査を行うというような使い方をすることのようである。借りた本もすぐ返却するのではなく、スリップを挟んで棚に置いておけば何日間もキープできるとのことである。

3. National Institutes of Health

NIHの中心となる施設は、NLMから北に10分ほど歩いたNIH最大の建物である Clinical Center である。ここにNIHの研究者のための図書館がある。NLMやLCといった重厚な図書館とは異なり、普通の大学図書館という印象である。所蔵タイトルは約4,000だが、あまり古い雑誌は所蔵していない。この目録もオンライン化されている。注目されるのは翻訳サービスを行っていることである。利用者の依頼による翻訳や、新着雑誌で注目すべき論文を翻訳して館内で配布もしている。世界の医学研究の最先端、それも研究者に最も近いところにある図書館ならではのサービスであろう。

その他、館内にはオンライン検索用の端末や CD-ROMなどが置かれ、それらの利用のためのセミナーも定期的に開催されている。また、図書館利用案内のためのツアーが毎週開催されている。この図書館は研究者向けだが、同じ建物の中に患者向けの図書館も設置されていた。コンサートホールも併設され、定期演奏会なども開催されていることにも見られるように、NIHの患者に対するサービスの姿勢が随所に感じられた。

最後に屋上の展望台から周辺の景色を眺めたが、上から見る Bethesda 周辺はほとんど森林風景なのに驚いた。

最後に、MLA '92参加中および原稿の執筆に当たり様々なご指導を頂いた慶應義塾大学医学情報センターの皆様、写真をご提供頂いた東京慈恵会医科大学医学情報センターの阿部信一様、およびNLMのクラフト敦子さんに厚く御礼申し上げます。